山 形 大 学 紀 要（教育科学）第12巻 第4号 平成13年2月
Bull of Yamagata Univ., Educ Sci., Vol. 12 NO. 4, February 2001

青年期における自己意識と対人恐怖心性との関係

堀 井 俊 章
保健管理センター
（平成12年9月22日受理）

要 旨

本研究は青年期における自己意識（感覚，感情など，自己の内的側面に注意を向ける傾向である私的自己意識と，自己の容貌，言動など，自己の外的側面に注意を向ける傾向である公的自己意識から成る性格要因）と対人恐怖心性との関係を数量的に検討することを目的とした。高校生256名（男子103名，女子153名），大学生271名（男子108名，女子163名）を対象に両概念を測定する質問紙尺度を実施した。統計分析の結果，高校生男子は公的自己意識が概ね対人恐怖心性と無相関であった。すなわち，高校生男子では公的自己意識が必ずしも対人恐怖心性（特に対人恐怖的行動）と関連をもたないことが明らかにされた。しかし，高校生女子と大学生では公的自己意識が対人恐怖心性と有意な正の相関を示し，両者の密接な関連性が示唆された。また，大学生では認められなかったが，高校生の私的自己意識は対人恐怖の自意識過剰性と有意な正の相関を示した。両者の関連については，私的自己意識の一側面である，心身の内的感覚や存在感覚に注意を向ける傾向と対人恐怖心性との関連という観点から考察された。

1 問 題

対人恐怖の傾向，いわば対人恐怖心性は日本の青年に普遍的にみられる心性である。対人恐怖心性の心理学的解明を図ることは青年期心性の理解に役立つと考えられる。堀井らは対人恐怖心性の従来の研究を踏まえ，対人恐怖心性の規定要因について調査研究を進めてきた（堀井・小川，1995[11]，1997 a[13]，堀井ら，1995[15]）。今回のリサーチはその一環であり，対人恐怖心性の規定要因と推測される自己意識（self-consciousness）と対人恐怖心性との関係に焦点をあてたものである。

自己意識については社会心理学の領域を中心に近年盛んに研究が行われている。Duval & Wicklund（1972）[5]は，自己意識の高まりを自己に注意が集中した状態（self-attention）と定義した。彼らはＴＶカメラや鏡を使い，実験的に自己に注意が集中する状態を作り出した。そして，その状態は被験者の注意が自己に集中していない状態とは心理的に異なることを明らかにした。たとえば，ＴＶモニターに自分が写し出された被験者は自己評定による自己評価が下がること，鏡によって自分に注意が向けられると，自分の行動を望ましい

方向へ近付けようと努力すること，などである。

この自己意識について，Fenigstein et al.(1975)[7]は個人のパーソナリティ要因としての自己意識について研究を試みた。その結果自己意識には二つの特性の存在が見いだされ，一つは私的自己意識（private self-consciousness），もう一つは公的自己意識（public self-consciousness）と命名された。私的自己意識とは，自己の内面，感情，気分など，他者からは直接観察されない自己の内面的側面に注意を向ける程度に関する個人差を表すものであり，一方，公的自己意識とは，自己の服装，容貌，他者に対する言動など，他者に観察される自己の外面的側面に注意を向ける程度に関する個人差を表すものとされている。この二つの自己意識に関する従来の研究では，両者を測定する尺度が利用され，私的自己意識の高い人はその時々での自分の意見，態度を自覚しているため，態度と行動との一貫性が高いこと（Scheier, 1980）[27]，また，公的自己意識の高い人は他者からの評価に敏感であり（Fenigstein, 1979）[6]，他者の目を意識して自己表出の仕方をコントロールする傾向の強いこと（Scheier, 1980[27]；Carver & Humphries, 1981[3]），などが明らかにされている。このように自己意識の高さはさまざまな対人行動に影響を与えることが示唆されている。

ところで，公的自己意識は対人恐怖心性と概念的に一部重複する対人不安と有意な関連を持つことが明らかされている（Buss, 1980[2]；Fenigstein, 1979[6]；Fenigstein et al., 1975[7]；Zimbardo, 1977[31]）。このような結果を受け，Leary（1983）[19]は公的自己意識が対人不安発生の規定要因である可能性が高いことを指摘している。なお，いずれの研究も私的自己意識は対人不安とほとんど関連を持たないことが確認されている。

従来，自己意識と対人恐怖心性との関連について検討した研究は少ないが，菅原(1984)[28]は，対人恐怖心性が公的自己意識と関連が高く，私的自己意識とは関連がほとんどないことを明らかにしている。しかし，この研究は大学生を対象とし，男女を込みにした分析であった。すなわち対人恐怖心性の中心年代である高校生を対象とした検討や，性別による検討は詳細になされていない。青年期の発達段階や性別によって対人恐怖心性の特徴が異なる（堀井ほか，1995）[15]ということを踏まえると，対人恐怖心性と自己意識との関係の在り方も発達段階や性別によって異なる可能性があると推測される。

そこで本研究では，対象を大学生だけでなく高校生にまで拡大し，自己意識と対人恐怖心性との関連について発達段階別および性別に検討することを目的とする。

2 方 法

1）調査対象

東京都およびその近郊の高校生256名（男子103名：平均15.3歳 *SD* 0.45, 女子153名：平均15.4歳 *SD* 0.49），大学生271名(男子108名：平均19.1歳 *SD* 1.23, 女子163名：平均19.1歳 *SD* 1.17)，計527名。

2）調査時期

1995年11月

3）質問紙

①対人関係質問票（林・小川，1981）[9]

この尺度は対人恐怖症者の悩みに基づいて尺度化されたもので66項目から成る。回答形

式は<全然あてはまらない>から<非常にあてはまる>までの7段階評定（得点は0から6）である。（なお，本論文執筆時には，対人関係質問票の改訂版である「対人恐怖心性尺度」(堀井・小川，1996[12]，1997b[14]）が作成されている。）

②自己意識尺度（黒沢，1992）[18]

この尺度は私的自己意識尺度（10項目）と公的自己意識尺度（10項目）の二つの下位尺度が含まれている。回答形式は<全然あてはまらない>から<非常にあてはまる>までの7段階評定（得点は1から7）である。

4）手続き

被調査者に前記の尺度を含む質問紙を集団場面で配布し回答を求めた。

3　結　　果

1）対人関係質問票について

①対人関係質問票の因子分析

回答者全体について，対人関係質問票66項目の相関行列を作成した。主因子法（共通性の推定値はSMC）により，固有値1.0以上を因子数の抽出基準としたところ，6因子が抽出された。6因子の累積寄与率は84.8%であった。その因子数のもとで共通性を反復推定し，プロマックス回転を行った。その結果得られた因子パターンを表1に示し，因子間相関を表2に示した。なお，あらかじめ男女別，学校段階別に因子分析が行われ，因子パターンにほとんど差異が認められないことを確認してから回答者全体の分析が行われた。

表1　対人関係質問票の因子パターン

項　　目	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	第Ⅳ因子	第Ⅴ因子	第Ⅵ因子	共通性
32）他人が自分をどのように思っているのかとても不安になる	.853	−.094	.120	−.036	−.069	−.030	.667
38）自分が人にどう見られているのかクヨクヨ考えてしまう	.829	.003	.000	.021	−.064	.016	.660
8）職場，学校のクラス，近所の人に自分がどのように思われているのか気になる	.805	−.068	.093	−.039	−.191	−.048	.517
13）自分のことが他の人に知られるのではないかとよく気にする	.643	−.029	−.008	−.028	.081	.082	.480
14）人と会う時に，自分の顔つきや目つきがその人に悪い印象を与えるのではないかと不安になることがある	.628	.039	.028	−.119	.046	.142	.500
60）相手にイヤな感じを与えているような気がして，相手の顔色をうかがってしまう	.619	−.056	.146	−.018	.053	.104	.540
20）人と会う時，自分の顔つきが気になる	.588	.021	−.059	−.113	.015	.166	.384
26）自分が相手の人にイヤな感じを与えているように思ってしまう	.559	.172	−.096	−.029	.203	−.016	.519
36）つまらないことをクヨクヨ考える	.548	−.015	.141	.071	.024	−.099	.409
2）先のことを考えすぎる	.429	.006	−.056	.016	−.020	.053	.181
7）自分のことが皆に知られているような感じがして思うようにふるまえない	.428	.129	.018	.044	.053	.064	.343
40）人前でぎこちない自分をさらけ出すのがつらい	.395	.140	.256	.026	−.065	.090	.436
66）知らない人からジロジロ見られていると感じたことがよくある	.385	−.096	−.024	−.074	.200	.141	.250

項 目	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	第Ⅳ因子	第Ⅴ因子	第Ⅵ因子	共通性
25) 友達が自分を避けているような気がする	.369	.338	−.138	.042	.220	−.047	.468
61) 二人きりでいると相手を意識してしまって緊張してしまう	.366	.097	.167	−.043	−.058	.305	.440
6) 感情的すぎる	.284	.075	−.197	.222	−.019	−.236	.174
9) グループでのつき合いが苦手である	−.059	.873	−.050	.000	−.063	−.047	.624
3) 集団の中に溶け込めない	−.159	.862	.140	−.065	−.042	−.063	.679
33) 多人数の雰囲気になかなか溶け込めない	.010	.803	.178	−.026	−.073	−.059	.708
15) 人との交際が苦手である	−.059	.755	.192	−.030	−.002	−.046	.716
39) 仲間の中に溶け込めない	−.013	.742	−.024	−.005	.122	.018	.628
27) 対人関係がぎこちない	.117	.642	−.010	.063	.084	.065	.630
21) 人が大勢いるとうまく会話の中に入っていけない	.086	.628	.265	−.014	−.092	−.030	.594
43) 人と自然につき合えない	−.006	.601	.067	.170	.062	.111	.625
1) つき合いの長い友人と話をする時も緊張がとれない	.104	.405	−.079	.066	−.063	.143	.235
37) 知らない人よりも知っている人と会う時の方が緊張する	.181	.362	−.168	.127	−.076	.170	.246
49) 知っている人を見かけても，顔を合わせないように道を避けてしまう	.168	.296	.066	−.060	.087	.188	.333
19) 話しをしている時の顔がこわばってイヤな表情になる	.189	.229	.007	.056	.074	.212	.309
34) 人前に出るとオドオドしてしまう	.033	.035	.747	.018	−.058	.103	.663
62) 引っ込み思案である	−.068	.115	.736	−.004	.093	−.014	.641
28) 会議などの発言が困難である	−.061	.035	.723	.013	.016	−.021	.514
10) 人がたくさんいるところでは気恥ずかしくて話せない	−.044	.210	.667	−.076	−.086	.038	.537
56) 内気である	.122	.172	.607	−.101	.106	.061	.520
50) 気が弱い	−.077	−.127	.604	−.189	.081	−.016	.541
16) 大勢の人の中で向かい合って話すのが苦手である	.190	.138	.602	−.076	.107	.145	.560
44) 小心である	.190	−.125	.591	.174	.060	−.091	.514
42) すぐにまごついたりとまどったりする	.145	.051	.459	.293	−.066	−.010	.521
29) 決断力がない	.016	−.054	.439	.294	−.102	−.057	.352
22) 大勢の人の前にいくと足がふるえ胸がつまる	.140	−.009	.398	.024	.073	.184	.308
4) 大勢の人がいると自分が圧倒されてしまうような感じがする	−.084	.336	.393	−.038	.004	−.071	.435
41) ひとつのことに集中できない	−.106	−.050	−.009	.816	−.037	.185	.640
35) 何をやるにも集中できない	−.158	−.058	.042	.731	.021	.210	.590
5) 根気がなく，何事も長続きしない	−.165	.025	.028	.715	−.024	.053	.469
11) ものごとに熱中できない	.113	.148	.007	.609	.055	.089	.447
23) 意志が弱い	.012	−.125	.297	.578	.035	−.075	.491
17) 計画を立てても実行が伴わない	−.021	.012	.092	.550	−.075	.029	.308
24) 気分がすぐに変わる	.078	.070	−.055	.540	.032	−.161	.340
30) すぐに気持ちがくじける	.172	−.010	.226	.456	.081	−.081	.481
12) 気持ちが安定していない	.262	.201	−.196	.381	.236	−.181	.495
18) 気分が落ち着かない	.273	.084	−.221	.358	.242	−.046	.425
51) 生きていることに価値を見出せない	−.082	−.036	.153	−.012	.723	.042	.557
57) 充実して生きている感じがしない	−.139	.021	.235	.021	.678	−.038	.543

項　　目	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	第Ⅳ因子	第Ⅴ因子	第Ⅵ因子	共通性
52) いつも疲れているような感じがする	−.033	−.079	−.005	−.040	.637	.097	.407
46) いつも頭が重い	.038	−.042	−.150	.079	.593	.126	.410
63) 何をやってもうまくいかない	.175	−.047	.180	.115	.488	−.032	.526
64) みじめな思いをすることが多い	.246	.064	.142	−.050	.439	.003	.476
45) 将来の自分にあまり期待が持てない	−.043	−.040	.193	.131	.393	.058	.317
58) 気分が沈んでしまって，やりきれなくなる時がある	.342	.030	.002	.068	.373	−.202	.388
48) 自分はまわりから変な人に思われているようだ	.071	.136	−.043	.064	.341	.002	.232
59) 人と目を合わせていられない	−.002	.044	.081	.094	−.011	.738	.666
47) 人の目を見るのがとてもつらい	−.027	.048	−.045	.054	.190	.670	.581
65) 人と話をする時，目をどこにもっていっていいかわからない	.136	.078	.013	.055	−.068	.654	.548
53) 顔をジーッと見られるのがつらい	.182	−.093	.206	−.021	.062	.520	.506
31) 向かい合って仕事をしている時，相手に顔を見られるのがつらい	.286	.119	.062	−.016	−.032	.390	.403
55) 友達と一緒にいる時，顔がこわばったり，赤くなったり，緊張したりする	.138	.210	.089	.005	.078	.309	.375
54) 自分のおかしいことを人に知られて，家の者に迷惑をかけているのではないかと気になる	.218	−.026	−.042	−.106	.284	.249	.256
説明分散	12.571	11.903	12.008	8.647	10.794	7.885	31.279

表２　対人関係質問票の因子間相関係数

	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	第Ⅳ因子	第Ⅴ因子
第Ⅱ因子	.425				
第Ⅲ因子	.413	.466			
第Ⅳ因子	.370	.285	.351		
第Ⅴ因子	.504	.452	.374	.519	
第Ⅵ因子	.329	.374	.446	.176	.341

各因子は，第Ⅰ因子を＜自分や他人が気になる＞心性，第Ⅱ因子を＜集団に溶け込めない＞心性，第Ⅲ因子を＜社会的場面で当惑する＞心性，第Ⅳ因子を＜自分を統制できない＞心性，第Ⅴ因子を＜生きることに疲れる＞心性，第Ⅵ因子を＜目が気になる＞心性と命名した(解釈は堀井・小川(1997ａ)[13]を参照)。また，表２より，因子間相関は　.176～.519の範囲にあった。

②対人関係質問票の発達的変化と性差

対人関係質問票の発達的変化と性差を検討するために，因子得点を用い，二要因（性×学校段階）の分散分析を試みた。表３に性別および学校段階別の因子得点の平均値と標準偏差，および分散分析の結果を示した。

表3　対人関係質問票の因子得点の平均値と標準偏差および二要因（性×学校段階）の分散分析の結果

	高校[a]	大学[b]	性差		発達差		交互作用
	M（*SD*）	*M*（*SD*）	*F*値		*F*値		
第Ⅰ因子	0.026(0.948)	−0.279(1.044)	6.44*	男<女	6.29*	大学<高校	1.15
<自分や他人が気になる>心性	0.150(0.882)	0.028(0.966)					
第Ⅱ因子	−0.033(0.926)	0.074(1.020)	0.20		3.96*	高校<大学	0.55
<集団に溶け込めない>心性	−0.135(0.885)	0.099(1.026)					
第Ⅲ因子	0.096(1.034)	0.102(0.937)	3.69		0.37		0.47
<社会的場面で当惑する>心性	−0.009(0.951)	−0.120(0.931)					
第Ⅳ因子	0.133(0.937)	−0.247(0.955)	1.42		6.96**	大学<高校	3.66
<自分を統制できない>心性	0.073(0.891)	0.012(0.975)					
第Ⅴ因子	0.116(0.953)	−0.104(0.952)	0.00		11.30***	大学<高校	0.48
<生きることに疲れる>心性	0.170(0.908)	−0.164(0.905)					
第Ⅵ因子	0.190(0.899)	0.031(0.877)	4.74*	女<男	6.72**	大学<高校	0.42
<目が気になる>心性	0.065(0.992)	−0.201(0.889)					

注．平均値と標準偏差は，上段が男子，下段が女子
[a]男子：$n=103$，女子：$n=153$
[b]男子：$n=108$，女子：$n=163$
***$p<.001$，**$p<.01$，*$p<.05$

表3をみてわかるように，六つの因子の内，五つの因子に学校段階の要因に有意な主効果が認められ，二つの因子に性の要因に有意な主効果が認められた。交互作用については，いずれの因子においても認められなかった。有意な主効果のみられた因子の得点に着目すると，第Ⅰ因子<自分や他人が気になる>心性は，高校生の得点が大学生よりも有意に高く，女子の得点が男子よりも有意に高かった。第Ⅱ因子<集団に溶け込めない>心性は，大学生の得点が高校生よりも有意に高かった。第Ⅳ因子<自分を統制できない>心性，第Ⅴ因子<生きることに疲れる>心性，第Ⅵ因子<目が気になる>心性は，高校生の得点が大学生よりも有意に高かった。また，第Ⅵ因子<目が気になる>心性は，男子の得点が女子よりも有意に高かった。これらの結果は堀井・小川（1996）[12]の結果とほぼ同様のものであった。

2）自己意識尺度について

①自己意識尺度の信頼性

自己意識尺度（私的自己意識尺度と公的自己意識尺度）については，各項目の平均，標準偏差，および合計得点との部分－全体相関を算出し，私的自己意識尺度については表4，公的自己意識尺度については表5に示した。各項目得点と合計得点との相関係数は，私的自己意識尺度は.373～.650の範囲に，公的自己意識尺度は.501～.799の範囲にあった。また，下位尺度ごとのCronbachのα係数を算出したところ，私的自己意識尺度は.797，公的自己意識尺度は.887となり，高い信頼性係数が得られた。

表4　私的自己意識尺度の項目分析の結果（$n=527$）

項　目　名	*M*	*SD*	部分－全体相関[a]
1. いつも，自分がどんな人間であるかを理解しようとしている	3.60	1.58	.650***
3. 自分の能力について考えることが多い	3.49	1.61	.499***
4. 離れたところから，自分を見つめている自分を感じることが多い	2.75	1.83	.504***
6. 自分が今どう感じているか，あまり注意を払わない（R）	3.65	1.35	.402***
7. 自分自身について，深く考えることはしない（R）	4.10	1.43	.548***
11. 自分の気分が変わると，それを敏感に感じる	3.80	1.39	.400***
12. あまり自分というものを意識しないたちである（R）	4.96	1.34	.522***
13. 何か問題を解く時の，自分の心の動きをそのまま感じる	3.16	1.44	.383***
16. あまり自分のことを反省したり，振り返ったりすることはない（R）	4.17	1.34	.373***
20. 自分の行為や考えに矛盾がないかどうか，いつも考える	3.28	1.50	.421***

注．（R）逆転項目
[a]各項目得点と合計得点との相関係数
***$p<.001$

表5　公的自己意識尺度の項目分析の結果（$n=527$）

項　目　名	*M*	*SD*	部分－全体相関[a]
2. 人前での自分のふるまい方が，気にかかるほうである	3.89	1.43	.649***
5. 人に自分をどう見せるか，ということに気を使う	3.63	1.42	.687***
8. 人の目に映る自分の姿について，いつも意識してしまう	3.64	1.47	.799***
9. 他人からどう見られるかを考えながら行動する	3.27	1.51	.674***
10. 私についての噂に関心がある	3.95	1.49	.519***
14. 人の目を気にせずに行動する（R）	3.42	1.53	.561***
15. 他の人が自分のことをどう思っているのか，まったく気にしない（R）	4.23	1.38	.613***
17. 人に良い印象を与えているかどうか，よく心配するほうだ	3.76	1.42	.716***
18. あまり自分の外見を気にしない（R）	4.05	1.42	.501***
19. 他人の評価をほとんど気にしない（R）	3.83	1.35	.511***

注．（R）逆転項目
[a]各項目得点と合計得点との相関係数
***$p<.001$

②自己意識尺度の発達的変化と性差

自己意識尺度の発達的変化と性差について，下位尺度ごとに二要因（性×学校段階）の分散分析を試みた。表6に各尺度の性別および学校段階別の平均値と標準偏差，および分散分析の結果を示した。それをみてわかるように，私的自己意識尺度は性の要因が有意であり，女子の得点が男子よりも有意に高かった。公的自己意識尺度は学校段階の要因が有意であり，高校生の得点が大学生よりも有意に高かった。交互作用はいずれも認められなかった。

表6　自己意識尺度の平均値と標準偏差および二要因（性×学校段階）の分散分析の結果

	高校[a]	大学[b]	性差		発達差		交互作用
	M（*SD*）	*M*（*SD*）	*F*値		*F*値		
私的自己意識尺度	33.29（ 8.35）	36.25（ 8.89）	6.17*	男＜女	3.68		3.50
	36.69（ 9.87）	36.73（ 7.84）					
公的自己意識尺度	37.52（10.48）	36.07（10.12）	2.92		9.01**	大学＜高校	1.91
	40.29（10.78）	36.37（ 8.97）					

注．平均値と標準偏差は，上段が男子，下段が女子
[a]男子：$n=103$，女子：$n=153$
[b]男子：$n=108$，女子：$n=163$
$^{**}p<.01$，$^{*}p<.05$

③私的自己意識尺度と公的自己意識尺度との相関

私的自己意識尺度と公的自己意識尺度との相関係数を学校段階別および性別に算出したところ，高校生男子では，.381，高校生女子では，.233，大学生男子では，.513，大学生女子では，.200であった。いずれも中程度以下の正の相関が認められた。

3）自己意識と対人恐怖心性との関係

自己意識尺度の下位尺度間，および対人関係質問票の因子間には中程度以下ではあるが，正の相関が認められた。そこで，自己意識尺度と対人関係質問票との相関係数は，下位尺度と因子の影響を統制した偏相関係数を算出した。その結果を高校生は表7に，大学生は表8に示した。なお，自己意識尺度の下位尺度や対人関係質問票の因子には，有意な発達的変化と性差が認められたので，両者の関係の分析は学校段階別かつ性別に行われた。

表7　高校生における自己意識尺度と対人関係質問票の偏相関係数

	対人関係質問票＼自己意識尺度	私的自己意識	公的自己意識
男子	第Ⅰ因子＜自分や他人が気になる＞心性	.220*	.532***
	第Ⅱ因子＜集団に溶け込めない＞心性	.102	−.186
	第Ⅲ因子＜社会的場面で当惑する＞心性	.110	.078
	第Ⅳ因子＜自分を統制できない＞心性	−.017	−.110
	第Ⅴ因子＜生きることに疲れる＞心性	−.004	−.049
	第Ⅵ因子＜目が気になる＞心性	.042	.111
女子	第Ⅰ因子＜自分や他人が気になる＞心性	.383***	.645***
	第Ⅱ因子＜集団に溶け込めない＞心性	.352***	.217**
	第Ⅲ因子＜社会的場面で当惑する＞心性	−.085	.275***
	第Ⅳ因子＜自分を統制できない＞心性	−.024	.221**
	第Ⅴ因子＜生きることに疲れる＞心性	.157	.292***
	第Ⅵ因子＜目が気になる＞心性	−.004	.218**

注．男子：$n=103$，女子：$n=153$
$^{***}p<.001$，$^{**}p<.01$，$^{*}p<.05$

表8　大学生における自己意識尺度と対人関係質問票の偏相関係数

	対人関係質問票＼自己意識尺度	私的自己意識	公的自己意識
男子	第Ⅰ因子＜自分や他人が気になる＞心性	.131	.629***
	第Ⅱ因子＜集団に溶け込めない＞心性	.152	.201*
	第Ⅲ因子＜社会的場面で当惑する＞心性	.101	.202*
	第Ⅳ因子＜自分を統制できない＞心性	−.096	.213*
	第Ⅴ因子＜生きることに疲れる＞心性	−.049	.352***
	第Ⅵ因子＜目が気になる＞心性	.153	.294**
女子	第Ⅰ因子＜自分や他人が気になる＞心性	−.003	.729***
	第Ⅱ因子＜集団に溶け込めない＞心性	.086	.401***
	第Ⅲ因子＜社会的場面で当惑する＞心性	−.082	.426***
	第Ⅳ因子＜自分を統制できない＞心性	.017	.428***
	第Ⅴ因子＜生きることに疲れる＞心性	−.119	.257***
	第Ⅵ因子＜目が気になる＞心性	.153	.300***

注．男子：$n=108$，女子：$n=163$
$^{***}p<.001$，$^{**}p<.01$，$^{*}p<.05$

①私的自己意識と対人恐怖心性との関係

高校生男子では，私的自己意識尺度は対人関係質問票の第Ⅰ因子＜自分や他人が気になる＞心性と.220の有意な正の相関を得た。しかし，他の因子との相関係数は−.017〜.110の範囲にあり，いずれも無相関であった（表7参照）。

高校生女子では，私的自己意識尺度は第Ⅰ因子＜自分や他人が気になる＞心性と.383の有意な正の相関を示し，第Ⅱ因子＜集団に溶け込めない＞心性とも.352の有意な正の相関を示した。それ以外の因子との相関係数は−.085〜.157の範囲にあり，無相関であった（表7参照）。

大学生男子では，私的自己意識尺度は対人関係質問票の各因子との相関係数が−.096〜.153の範囲にあり，いずれも無相関であり，大学生女子においても，私的自己意識尺度は対人関係質問票の各因子との相関係数が−.119〜.153の範囲にあり，いずれも無相関であった（表8参照）。

②公的自己意識と対人恐怖心性との関係

高校生男子では，公的自己意識尺度は対人関係質問票の第Ⅰ因子＜自分や他人が気になる＞心性と.532の有意なかなりの正の相関を得た。しかし，他の因子との相関係数は−.186〜.111の範囲にあり，いずれも無相関であった（表7参照）。

高校生女子では，公的自己意識尺度は第Ⅰ因子＜自分や他人が気になる＞心性と.645の有意なかなりの正の相関を持ち，他の五つの因子とも.217〜.292の有意な正の相関を得た（表7参照）。

大学生男子では，公的自己意識尺度は第Ⅰ因子＜自分や他人が気になる＞心性と.629の有意なかなりの正の相関を得た。また，他の五つの因子との相関係数も.201〜.352の範囲にあり，いずれも有意な正の相関を示した（表8参照）。

大学生女子では，公的自己意識尺度は第Ⅰ因子＜自分や他人が気になる＞心性と.729の有意な高い正の相関を得た。また，他の五つの因子との相関係数も.257〜.428の範囲にあり，いずれも有意な正の相関を示した（表8参照）。

4　考　　察

1）私的自己意識と対人恐怖心性との関係

大学生においては，男女ともに私的自己意識尺度は対人関係質問票の各因子とすべて無相関であった。高校生においても私的自己意識尺度は，男女ともに対人関係質問票の第Ⅲから第Ⅵ因子の四つの因子と無相関であった。このような両者の無関連を示唆した結果は，大学生においてそれとほぼ同様の結果を得た菅原（1984）[28]の研究によっても支持される。また，私的自己意識は対人恐怖心性と概念的に一部重複する対人不安（social anxiety）と無相関であるとする報告（押見ら，1986）[26]によっても支持される。

ところが，高校生において私的自己意識尺度は，対人関係質問票の第Ⅰ因子＜自分や他人が気になる＞心性と，男女ともに有意な低い正の相関を得た。また，女子はそれだけでなく，第Ⅱ因子＜集団に溶け込めない＞心性とも有意な低い正の相関を得た。すなわち，高校生では，私的自己意識が男女ともに＜自分や他人が気になる＞心性と低いながらも関連を持ち，女子はさらに＜集団に溶け込めない＞心性とも関連を示したのである。

先述したように，高校生と大学生間において，量的には私的自己意識に有意な差異がみられなかった。したがって，私的自己意識の量的な発達変化が対人恐怖心性に影響を与えたわけではないと考えられる。おそらく，高校生の私的自己意識には，大学生と異なる質，換言すると，対人恐怖心性との関連をもたらすような，何らかの私的自己意識の特質や機能があると推測される。

思春期には，周知の通り第二次性徴によって身体の急激な変化と性衝動の高まりが生じる。これはまさに「私に何がおこっているのか」(西園，1977)[24]と表現されるような心身の状態であり，それは自己の身体感覚を中心とした心身の変化に対する戸惑いを表し，そこには当然，心身の感覚に対する過剰な意識が成立しやすくなる。今回の被調査者の高校生は全員1年生であり，思春期の中心年代である中学生と比較すると幾分安定の傾向にはあると考えられるが，依然として心身の感覚への過敏性が強い世代である。このような自己の心身の感覚という内面的な側面に向けられた意識の在り方こそが，この世代の私的自己意識の一つの特徴と思われる。森田療法の創始者である森田（1932[20]，1953[21]）によると，対人恐怖を代表とする森田神経質の発症は「ヒポコンドリー性基調」が要因となる。「ヒポコンドリー性基調」とは，心気性を意味し，身体感覚などの内的感覚を敏感に察知し，それに注意を集中する傾向である。そして，その傾向が強く，ある症状としての感覚にとらわれると対人恐怖が発症することになる。このように考えると，高校生の持つ心身の感覚への注意に代表される私的自己意識の高まりは，「ヒポコンドリー性基調」に類似するような過敏で心気的な状態を生起させ，それが対人関係における自他へのとらわれを意味する＜自分や他人が気になる＞心性の強まりにつながったのかもしれない。

ところで，女子の場合は，私的自己意識は＜自分や他人が気になる＞心性だけでなく，＜集団に溶け込めない＞心性とも有意な関連を示した。これは私的自己意識が男子のように観念的な心性を表す＜自分や他人が気になる＞心性との関連だけでなく，より社会的場面での行動的な問題との関連にまで拡大したことを意味する。女子は一般的に身体的変化に対する過敏性や心身の感覚への鋭敏さを男子より強く持ち，しかも，私的自己意識尺度

の得点は女子の方が男子よりも有意に高かった。したがって女子のほうが，ヒポコンドリー性基調に類似する状態に近づき，私的自己意識の高まりが対人関係における観念的な不安に収まらず，行動レベルの問題にまで関連範囲が広がりをみせたのかもしれない。

一方，大学生になると，男女ともに私的自己意識と対人恐怖心性との有意な関連は消失する。これは高校1年生に比し，大学生では，第二次性徴による身体感覚を中心とした心身の内的感覚の変化が大部収まり，安定に向かうことから，それと関連していた対人恐怖心性も同時に終息の方向に向かうためと考えられる。私的自己意識の質としては，心身の感覚に向けられた鋭敏な意識から，ある程度の心身の安定感を基盤とした上での自己の内面的理解への意識へと比重が移行したと推測される。このような質の私的自己意識の場合，それが高じても，観念的にも行動レベルにおいても対人恐怖心性が高まることはないであろう。

また，別角度から検討すると，高校生は「私は一体，何者なのか」(西園，1983)[25]と表現されるような自己の存在への問いかけも生じる世代である。そのような私的な意識の中で高校生は自己批判的傾向が高く自己受容性が低いともいわれている(加藤隆勝，1977[17]；平石，1990[10])。このような自己の存在を否定的に評価する意識的在り方を強くもてば，対人関係においても投影的に他者が自己を否定的に評価するのではないかという不安が生じやすくなるであろう。すなわち，自己の存在を中心とした内面的側面に対する自己意識（私的自己意識）の高まりは，自らの否定的な評価と相俟って，他者からの評価懸念を表す＜自分や他人が気になる＞心性と有意な関連を示したといえるかもしれない。また，先述した心身の変化に対しても，それが自己にとって恥ずべきもの，受け入れがたい否定的なものとしてとらえられやすいこの年代の人たちにとっては，投影的に他者も自己を否定的に評価するのではないかという不安が生じやすくなると考えられる。

一方，大学生になると，「これが私である」(西園，1977)[24]というような心的状態が生じ，自己受容性が高まっていく。したがって，必ずしも私的自己意識の高まりが自己否定に至らず，ある程度の安定感をもって自己内省を深めるというような意味を持ってくる。その結果，対人恐怖心性との関連が消失するのであろう。なお，ここでいう自己受容とは，社会的存在としての自己の受容というよりも，自己の心身の感覚，気分，感情，思考などの内面的，私的な自己の受容を意味する。

以上，心身の内的感覚に向けられた私的自己意識と，自己の存在に向けられた私的自己意識という観点から，私的自己意識と対人恐怖心性との関連の検討を試みた。

2）公的自己意識と対人恐怖心性との関係

大学生および高校生の男女ともに，公的自己意識尺度は対人関係質問票の第Ⅰ因子＜自分や他人が気になる＞心性と有意な高めの正の相関を示した。＜自分や他人が気になる＞心性は，他者からの評価懸念を表す。したがってこの結果は，公的自己，すなわち見られる自己に対する意識が高まると他者の自らへの評価を気にしやすくなる，ということを明らかにした Fenigstein (1979)[6]の研究によっても支持される。見られる自己に無関心であるならば，他者からの評価にも無関心であり，それにまつわる懸念や不安が生じることもほとんどあり得ないだろう。ただし公的自己意識は，本来は見られる自己への否定的評価を伴わない中立的な意識の集中を表すものである。しかし，公的自己意識尺度の項目の一

部には，「気にかかる」「心配する」のように，見られる自己への意識の在り方に否定的な感情が付与されている。これは第Ⅰ因子＜自分や他人が気になる＞心性に高い負荷を示した項目と同義反復になってしまい，それが高い相関に影響を与えたとも考えられる。今後は公的自己意識尺度の一部の項目の改良が望まれる。

また，大学生においては，男女ともに公的自己意識尺度は対人関係質問票のすべての因子と有意な正の相関を示した。高校生女子においても，公的自己意識尺度は対人関係質問票のすべての因子と有意な正の相関を示した。これらの結果は，大学生を対象としてほぼ同様の結果を得た菅原（1984）[28]の研究によっても支持される。鍋田（1989）[23]の見解によると，公的自己意識が高まると，必然的に人は高い理想のかくあるべき姿に近づこうとする。それゆえ，それに到達しえない自己を発見することが多くなり，自己嫌悪的で対人恐怖的になるのである。

ここまでの本研究の結果においては，公的自己意識は対人不安の規定要因の一つでありうるとした従来の研究結果（Buss, 1980[2]；Fenigstein et al., 1975[7]；Leary, 1983[19]）によっても支持される。すなわち，公的自己意識が高くなることによって対人不安が高くなるならば，公的自己意識は対人不安と有意な関連を示すことが不可欠であるからだ。

ところが，高校生男子では，公的自己意識尺度は第Ⅰ因子＜自分や他人が気になる＞心性以外のすべての因子と無相関であった。これは公的自己意識が対人恐怖心性や対人不安の規定要因でありうるとする従来の見解を覆し得るような興味深い結果といえる。また，学校段階の違いにかかわらず，男子は女子よりも，公的自己意識と対人恐怖心性との相関が低めであった。また，性別の違いにかかわらず，高校生は大学生よりも公的自己意識と対人恐怖心性との相関が低めであった。これらの要因や意味について考察してみたい。

第Ⅰ因子＜自分や他人が気になる＞心性は自他へのとらわれを表す，いわば観念的な不安意識を表す。一方，第Ⅱ因子＜集団に溶け込めない＞心性は集団との交際に関する問題，第Ⅲ因子＜社会的場面で当惑する＞心性は社会的場面におけるパフォーマンスにまつわる問題，第Ⅵ因子＜目が気になる＞心性は，対人場面におけるアイコンタクトの問題を表す。すなわち，この三つの因子はいずれも対人場面における行動上の問題に重きが置かれている。なお，第Ⅳ因子＜自分を統制できない＞心性と第Ⅴ因子＜生きることに疲れる＞心性は，観念的な不安意識や行動上の問題に随伴しやすい心性である。このような枠組みのもとで考えてみると，男子や高校生では公的自己意識が高まる場合，それに伴い観念レベルとして同種の＜自分や他人が気になる＞心性が高まっても，行動上の問題にまではあまり影響を及ぼさない可能性を示唆している。反対に公的自己への意識が低くても，すなわち観念的な公的自己意識が稀薄な状態においても，社会的場面における行動上の問題が生じる場合があることを意味する。これは換言すると，他者との関係における思惑（観念）から離れたところで行動上の問題が生じる場合があることを意味する。つまり，男子や高校生の場合，観念的な公的自己意識と行動上の問題に乖離傾向があることを示唆している。

性差については，男子は公的自己意識が女子よりも有意に低い傾向があった（$p<.10$）。この点を踏まえると，男子は女子と比較すると公的自己意識が未成熟ないしは発展途上にあるため，それが行動上の問題にまで波及しないといえるかもしれない。また，女子は身体や容貌への劣等感が強い（福井・小嶋，1973）[8]ために，公的（見られる）自己意識が身体や容貌への意識として向けられやすく不安を感じやすい。しかし，男子は同じように見

られる自己が意識されても，身体や容貌への劣等感が女子よりも強く喚起されないために社会的場面での行動にまで問題が拡大されないと考えられる。性役割の観点からも，男子は対人場面において，堂々とたくましく自己主張的に行動することが望ましいとされている(東，1987[1]；伊藤，1978[16])。男子は見られる自己が意識され不安が喚起されそうになっても，社会的行動場面においてはその不安を性役割によって否認する傾向にあるのかもしれない。

学校段階における差異については，高校生は自己中心的主観的になり，自己の現実を客観的に認知することが困難になりやすい（村瀬，1983)[22]。つまり，客体的自己意識の機能が未成熟であったり，不安定で混乱したものであったりする。これは公的自己意識や行動上の問題意識を適切に，または分化してとらえたりすることが困難な傾向を意味する。このようなことが両者の無相関に幾分関与していると思われる。しかし，それ以上に高校生特有の自己顕示性の影響も大きいと考えられる。高校生は劣等感も強いが反対に自己を過大評価し，極端な自信や思い上がりを持つ傾向にある（村瀬，1983)[22]。それに伴い自己顕示欲求もかなり高まるようになる（津留，1981)[30]。菅原（1988)[29]によると，自己顕示性とは他者に「まなざし」を向けられることへの積極的姿勢であり，「まなざし」に対する不安感を基調とする対人恐怖心性とは概念的に相反するものとされている。この積極的姿勢は不安の否認や抑圧がその背景にあるかもしれないが，いずれにせよ，公的自己意識の高い者は，他者から見られることに強い関心を持ち，自己顕示的になり，その結果，対人場面での行動がむしろ積極的，促進的となる場合がある。このようなことを踏まえると，公的自己が強く意識されたとき，従来いわれているように，劣等感や評価懸念により対人場面での不安や回避を引き起こす者だけでなく，自己顕示性により対人場面への積極的な行動をとる者もかなり存在することが予想される。つまり，公的自己意識の高まりは行動上の抑制と促進に分かれ，お互いに相殺し合ったり，両者が錯綜したりすることによって，公的自己意識と対人恐怖的な行動上の問題が無相関になったと思われる。

大学生においては客体的自己意識の機能が成熟に向かい，公的自己意識や行動上の問題意識を分化して適切にとらえることが可能になる。また，自己の過大評価も収まり，見られる自己を意識することによって生起する不自然な自己顕示的な行動も収まる傾向がみられる。したがって，公的自己意識の高まりが本来想定される不安感のみを引き起こしやすくなったために，公的自己意識がその不安感に直結する行動上の問題とも関連を持つようになったと考えられる。

また，社会的アイデンティティという観点からも検討できよう。すなわち，大学生は社会的存在として自己を確立していく時期である。公的自己意識は本来，社会的アイデンティティとして意味を担うといわれている（Cheek & Briggs，1982)[4]。つまり，大学生においては，そのような意味が一層明瞭になり，公的自己がより広い社会的存在としての自己としての意味を持つようになる。その結果，見られることへの意識の高まりが他者の評価懸念という限定された領域にだけでなく，社会的存在としての自己が問われる社会的場面における行動の問題にまで影響が拡大したといえるかもしれない。

以上の結果，学校段階や性別によっては自己意識が対人恐怖心性と関連性をもたず，規定要因にもなりえない場合も有することが認められた。しかし，大学生男女および高校生女子の公的自己意識は対人恐怖心性全般の規定要因の一つである可能性をもち，また，高

校生男女の私的自己意識は，＜自分や他人が気になる＞心性の規定要因の一つである可能性をもつことも示唆された。しかしながら，両者の因果関係が明確にされたわけではない。また，対人恐怖心性が自己意識に影響を及ぼすという可能性も否定されていない。今後は縦断的調査や実験など幅広い実証的な研究のアプローチが必要である。

文　　献

1）東　清和（1987）：人間関係と性差．島田一男（監），講座人間関係の心理6性格と人間関係．ブレーン出版．143－169.

2）Buss, A. H.（1980）：*Self-consciousness and Social anxiety*．San Francisco, CA : Freeman.

3）Carver, C. S., &Humphries, C.（1981）: Havana daydreaming : A study of self-consciousness and the negative reference group among Cuban-Americans. *Journal of Personality and Social Psychology*, 40, 545－552.

4）Cheek, J. M., &Briggs, S. R.（1982）: Self-consciousness and aspects of identity. *Journal of Research in Personality*, 16, 401－408.

5）Duval, S., &Wicklund, R. A.（1972）: *A Theory of Objective Self-awareness*．Academic Press, New York.

6）Feningstein, A.（1979）: Self-consciousness, self-attention, and interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 75－86.

7）Feningstein, A., Scheier, M. F., &Buss, A. H.（1975）: Public and private self-consciousness : Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 522－527.

8）福井康之・小嶋秀夫（1973）：高校生における対人恐怖の実態．いしかわ精神衛生，14，55－60.

9）林　洋一・小川捷之（1981）：対人不安意識尺度構成の試み．横浜国立大学保健管理センター年報．1，29－46.

10）平石賢二（1990）：青年期における自己意識の発達に関する研究（Ⅰ）－自己肯定性次元と自己安定性次元の検討．名古屋大学教育学部紀要－教育心理学科－，37，217－234.

11）堀井俊章・小川捷之（1995）：思春期・青年期における対人不安意識の時代的推移．上智大学心理学年報，19，75－84.

12）堀井俊章・小川捷之（1996）：対人恐怖心性尺度の作成．上智大学心理学年報，20，55－65.

13）堀井俊章・小川捷之（1997 a）：青年期における対人不安意識の発達的変化．心理臨床学研究，14，448－455.

14）堀井俊章・小川捷之（1997 b）：対人恐怖心性尺度の作成（続報）．上智大学心理学年報，21，43－51.

15）堀井俊章・卯月研次・小川捷之（1995）：青年期の対人不安意識に関する研究．心理臨床学研究，13，215－221.

16）伊藤裕子（1978）：性役割の評価に関する研究，教育心理学研究，26，1－11.

17）加藤隆勝（1977）：青年期における自己意識の構造．心理学モノグラフ14．東京大学出版会.

18）黒沢　香（1992）：自己意識尺度と自尊心尺度．千葉大学人文研究，21，79－122.

19）Leary, M. R.（1983）：*Understanding social anxiety*．Beverly Hills, California : Sage.（レアリー

M．R．生和秀和（監訳）(1990)：対人不安．北大路書房.）
20）森田正馬（1932）：赤面恐怖症（又は対人恐怖症）と其療法．神経質，3．
21）森田正馬（1953）：赤面恐怖の治し方．白揚社．
22）村瀬孝雄（1983）：思春期の諸相．飯田　真ほか編，岩波講座精神の科学6ライフサイクル．岩波書店，141－180.
23）鍋田恭孝(1989)：対人恐怖症．福島　章編，性格心理学講座3適応と不適応．金子書房．299－315.
24）西園昌久（1977）：対人関係論．精神医学，19，1224－1239.
25）西園昌久（1983）：対人恐怖と手首自傷－性同一性障害としての理解－．清水將之ほか編，青年の精神病理3．弘文堂，201－232.
26）押見輝男・渡辺浪二・石川直弘（1986）：自己意識尺度の検討．立教大学心理学科研究年報，21・22，1－15.
27）Scheier, M. F.（1980）: Effects of public and private self-consciousness on the public expression of personal beliefs. *Journal of Personaliy and Social Psychology*，39，514－521.
28）菅原健介（1984）：自意識尺度（self-consciousness scale）日本語版作成の試み．心理学研究，56，184－188.
29）菅原健介（1988）：対人的不安研究における公的自意識の意義について．東京都立大学人文学部人文学報，196，103－116.
30）津留　宏（1981）：高校生の心理－高校時代をどう生きる－．大日本図書．
31）Zimbardo, P. H.（1977）: *Shyness : What it is and what to do about it*. New York : Jove.（ジンバルドP. H. 木村　駿・小川和彦（訳）(1982)：シャイネス．勁草書房.）

Summary

Toshiaki HORII :

A study of the relationship between self-consciousness and anthrophobic tendency in adolescents

The purpose of this study was to investigate the relationship between self-consciousness (public and private consciousness) and anthrophobic tendency in adolescents. "The self-consciousness scale" measuring public and private consciousness and "The inventory of negative self-awareness in interpersonal relationships" measuring anthrophobic tendency were administered to 256 senior high school students and 271 college students. The results showed that for female senior high school students and college students, public consciousness and anthrophobic tendency correlated positively, while there was an uncorrelativeness for male senior high school students, and for high school students, private consciousness and part of anthrophobic tendency correlated positively, while there was an uncorrelativeness for college students. These results suggested self-consciousness was partially related to anthrophobic tendency.

(Health Administration Center)